

引用一覧（日本語訳）

（番号はジャルティ先生の講演テキストの段落番号）

2) 「私は、闇取引をして安っぽい代物を作るのか、それとも、豪華な論文を作るのか、豊かで、高度に斬新なオブジェを創るのか、塩茹でしたろくでもない付け合わせを作るのか、まだわかりません」

3) 「僕は芸術批評や博識のことは無視します。よく知られたダ・ヴィンチを僕は遠ざけ、ダ・ヴィンチ的な精神のひとつの（力学的モデルという意味での）モデル、僕にとってはすべて、次のような点に還元される問題の諸条件を確立したいと思っています。すなわち、「ダ・ヴィンチは普遍的な（万能の）精神であったと言われるが、これはどういう意味なのか？この命題の実際はいかなるものなのか？人は普遍的（万能）になりうるのか？普遍的（万能）になる方法は存在するのか？そのような精神を構成する必要条件、論理的かつ類推的な条件とはいかなるものなのか？」ファラデーやケルヴィン卿といった人達の極めて見事な科学的方法を採用すること。すなわち、（これらの科学者たちもはっきりとは引き出さなかったことですが）想像力というものを、共通の尺度を持った装置として研究すること、そして、想像力に関わる現象そのものを、それが非常に数多くの様々な事物の間に**自動的に**創り出す関係の尺度として研究すること、それが僕の目指すところなのです」。「この仕事はきわめて困難です」

「あるひとりの人間——彼の様々な行動が、それぞれまったく異なったものと見えるので、仮にそれらの行動の基底にひとつの思考を想定しようとする、これ以上広い思考はないだろうということになるような人間——私はそんな人間を想像しようと目論んでいるのだ」。

4) 「思考によって成り立つこの人物には名前が欠けており、そのために平常はあまりに遠く懸け離れ、ともすれば見失われがちなその両端の膨張を制御することができないのだ。レオナルド・ダ・ヴィンチという名前以上にふさわしい名前はまったくないと、私には思える」。

5) 「ひとりの人間に何ができるか」

「ひとりの人間のあとに残るものは、彼の名前と、そして、その名前を感嘆や、憎悪や、あるいは無関心の徴たらしめる彼の業績とを手がかりに、ひとびとが心に思い浮かべるあれこれのものである。われわれは、彼もまた思考したのだと考え、そして、じつはわれわ

れが彼に帰したものである思考を、彼の業績のなかにふたたび見出すことができるのだ。われわれ自身の思考にかたどって、その思考をふたたび作り上げることができるというわけだ」。

6) 「人間の業績に下される判断をゆがめている多くの錯誤は、その業績の生成過程を奇怪にも忘却していることに基づく」「作品をいかにしてかたちづくったかを語る勇気をもつ作者はきわめて少ないが、私の考えるところでは、それを知る危険をあえて冒した作者の数も、同様にあまり多くはない。こうした探究は、苦しみを堪えて光栄に関する諸概念と称賛の形容詞とを放棄することからはじまる。それは、優越性という考え方も偉大さへの偏執ともまったく相容れない。それは見かけの完璧の下に相対性を発見させる。もろもろの精神は、それぞれの所産がそう見せるほど深く相異なるものではないと思わせるために、この探究が必要なのだ」。

7) 「地面や石塊の墜落に見られる迅速さあるいは緩慢さから、またどっしりと重厚な彎曲から、幾重にも重なる衣服の波形の襲へと彼は進んでゆく。家々の屋根にたちのぼる煙から、遠方の喬木の繁みや地平線に茫漠と霞むぶなの群れへと、魚から鳥へと、海上の太陽の閃めきから無数の華奢な鏡のような樺の葉へと、魚の鱗から入江の上を移動する輝きへと、耳や巻毛の髪から貝殻の凝結した渦巻へと、彼は進んでゆく」。

「ヴァレリーをして『方法序説』を書かしめたあの熱狂と一種の傲慢は、彼のその後の作品に再び見出されることはなかった。[...] 或る個人、その卓越性は熱狂というものにどんな価値も認めないという点にあるような個人に対するあの熱狂、ナイーヴさなどというのはその人にとって無縁であるが故に他のいかなる芸術家よりもヴァレリーが上に置いた一人の芸術家に対するあのナイーヴな思い上がりは、過剰と眩暈の時、弱いが大胆な時を示している。そして、そのような時は、もはや二度と繰り返されることはなかった」。

10) 「僕は、熱意もないまま、論文に向かっている。外は雪が降っている。すべてがのっぺりとしてぐうの音も出ない。この哀れなダ・ヴィンチはつらい試練の時を過ごしそうだ。太陽もなく、希望もないままに書かれるだろう。テーブルの上に、古いノート、アルバム、手帖、そして封筒の裏なんかを全部出してみた。これらは、さっと捉えられた重要な言葉しか受け付けないんだ。「あとは、包装、凝った言い回し（これを僕は、付け合わせのじゃがいもがたっぷりのシャトブリアンスステーキと呼んでいるんだ）、行数稼ぎのための引用を少々、それで終わりさ」。

「散歩から戻って、アダン夫人に頼まれた仕事に取り組んでいます。この仕事は僕に、棒でたたくような苦痛を与え始めています。大切な論文の中で、贅沢な対象だけを扱ったは

ずなのに、実は、つまらないこと、そして、ごくありふれたことをしているというのにはうんざりします」。

「ダ・ヴィンチは最悪の状態だよ」「僕はそんなことは判りすぎるほど判っていた。でも、この存在についていったいどう言えばいいというのだろう。文体については形容のしようがないけれど、見事なものだ。「注意に値する指摘にわれわれは至った」という類だね」。

11) 「我が親愛なる友よ。それはごく単純に言って「素晴らしい」の一言だ。このような文章は未だかつて読んだことがない。すっかり感動したよ」。

「アダン夫人は、僕の論文をちょっと長ったらしいと思うのではないかと心配です。その場合、僕は、論文を短くすることはできないので、辞退することになるでしょう」。

「アダン夫人はあなたのダ・ヴィンチ論をたいへん称賛していたということを是非申し上げねばなりません。ただ、あまり味のきつい食べ物は予約購読者の消化に及ぼす影響が大きすぎるらしく、読者は怒って講読をやめてしまいます」。

「告白しますが、私が傷ついたのは、私が母に対して感じている愛情と熱狂との関連においてであり、あなたにお話しすることをお許し願いたいのですが、こうした感情との関係においてなのです」。

12) 「論文をお返しいただきましてありがとうございました。私は、返された論文を、興味深く眺めております。といたしますのも、この論文は、「注文を受けて」作られた (*être fait sur commande*) という榮譽 (注文で出来た原稿という榮譽) と同時に、「お好みに合わずに」作られた (*n'être pas fait sur mesure*) という不幸 (注文に添わなかった原稿という不幸) を持ったからです」。

「作品の偉大な価値の名において」

「おびき寄せる」

13) 「私はひとりの人間を想像するつもりだ *Je me propose d'imaginer un homme...*」

14) 「カンタン社に依頼して、冒頭に「M・シュウオップに *ter quaterque*」と記した抜き刷りが出来上がったら、モンペリエ (ヴィエイユ・アンタンダンス通り 9 番地) から、あなたにお送りいたします」。

「ヴァレリー氏は、深い知性に裏打ちされた明晰さでもってダ・ヴィンチの方法について語っている」

「私の編纂したダ・ヴィンチ手稿がどういうものであるか、いくらか、語って、読者がそれを直接検討するように誘ってくださらなかったのが残念です」。

「あなたのお気に召すものを書くことができたとすれば、それはまさしくあなたのおかげです。あなたは、私に対して、誠実かつ明晰に、勇気付けてくださった唯一の人物です」。

「あなたのこの仕事にコメントをつけるなどという大それた勇気を私が持つことはないでしょう。あなたの論文を読んで、私は大いに学ばせてもらいました。あなたの将来がどれだけ素晴らしいものか、それを知りたいという私の称賛の念の告白以外には、コメントのしようもないのです」。

「つまり、論文は掲載されたわけだね。私は、君の論文を読んで、魅了された。びっくりしたのではない。繊細微妙な浮き彫りのすべてと共に、(その素晴らしさは) 察せられたよ、何度も、君が高度に思考した対話の途中に (それは、示されたものだ)、親愛なるヴァレリーよ。それは私の心を打つ。どれだけ、君が、ほとんど目には見えない指使いで、君の新しい精神による極めて理解可能で、鋭い、現在のシンフォニーを、間隔を空けて、そして、グループへと、まとめあげていることか。まさしく、その指使いは見事で、脇に逸れることがないために、ダ・ヴィンチの形象 (フィギュール) は、その報酬をしっかりと受託している」(1895年9月6日付けの手紙)。

16) 「そして、今や、その人物が、行動のために行動している様子、人が純粋科学に熱中するように純粋行為に熱中する姿が見える。その人物が、この熱情に心焦がしている様、この驚くべき放蕩に心焦がしている様うかがえる。広大な領土が彼の手の間で形を変え、人間たちが走り回り、戦い、ひとつの強力な思考がその人間たちに割り当てる円環の中で豊かになり、そして、人間たちの本能と本性の働きによって、天才的な遊戯者によって予見されたことがらを、それらの人間たちがやりとげるのを感知して初めて、その人物の熱情・放蕩は満足するのだ」。

17) 「再度取り組まれることの可能な作品のひとつの形式を構成する諸要素」「というのも、そこに見出される自伝的な部分は、哲学的な輪郭を、奇妙なかたちで拡張しているからです。人は長い間、そのことを忘れていました。実際、そこには、「小説 roman」の萌芽があって、それは今でも、作るに値するものです。広大な精神の小説であり、そこには、知的な探究が経験する様々な姦通や室内装飾や決闘が含まれています」。

「某氏の肖像 *Portrait de Monsieur Un Tel*」

「騎士オーギュスト・デュパンの生涯と孤独な冒険。騎士デュパンの回想録。ロンドン、1853年。精神のカサノヴァ」。

18) 「もしテスト氏が、その精神の規則的な力を世界に対して振り向けていたとすれば、彼に抵抗しうるものは何もなかったであろう」

「ひとりの人間に何ができるか？」

「テストについては、真実は単純です。つまり、私は、長い間、認識というものについて、というか、むしろ、ある種の操作について、探究を重ねてきました。私は、テスト氏に、そうした認識や操作を発見した人物の状態を仮託したのです。ああ、と嘆くべきか、それとも、幸運なことにと言うべきか、私はただの対話者に過ぎず、今も、そうに過ぎません」。

「私は、彼が見られていることを感じているかどうか自問した。私は視線を彼の視線から乱暴にそらして、彼の視線が私を追いかけるところをつかんでやろうとした」

「私は自分を憎み、自分を称えた。そして、われわれは共に年老いたのだ」
「愚かごととは私の得意ではない」

「私は存在している、私を見ながら。私を見る私を見ながら。以下同様」。

20) 「この男（テスト氏のこと）は僕を悩ませる。どうやって片付けたらいいのかわからない。神経痛がひどくて、ただひたすら呆然とするしかないような時は、特にそうだ。しかし、文体を除けば、全体の構成と組み方が失敗している。二つか三つ、面白いことを書き込んでいると思うのだが、よくよく近づいて見てみると、全然、**文学的**ではない」。

「不幸にも、私は泥沼にはまっています。ある物語を語りたいのですが、最初の言葉が見つからないのです」。

「あなたの『テスト氏との一夜』は素晴らしい出来であると判断します」。

21) 「私が考えていたドガは、自己を要約して一枚の克明なデッサンの厳密さと化した人物であり、彼はまたスパルタ的な禁欲主義者であり、言わば、一種の芸術上のジャンセニストであって、或る知的な残酷さがその本質的な性格となっていた。私は彼と会うのよりも少し前に『テスト氏との一夜』を書いたのだが、それがことごとく実証しうる、出来る

だけ明確な観察や叙述から成るものであったのにもかかわらず、この架空の人物を描いた小品はやはり或る程度まで**私が考えていた一種のドガ**によって、よく使われる言葉で言えば**影響**されずにはいなかったのである」。

「私に理解できない代物を捧げられるのはごめんだ。詩人はもうたくさんだよ」。

22)「君にそれほど期待していなかったというのではない。断じてそうではない。しかし、こんな(すごい)ものとは思わなかった。これは、まさしく、確信してもらってよいが、「作るべきもの」ものだ。そして、それは書かれた!……完璧だ!」

『テスト氏』の「エクリチュール」についての話は勘弁してくれたまえ。一週間で当たり次第に(運任せで)材料をつなぎ合わせて作った代物なのだから」。